

論 文

# 教員の属性と求めるリレーションシップ、 教育方法

藤田 三恵・坂井 恵子\*<sup>1</sup>・窪 のり子\*<sup>1</sup>

古保 志保\*<sup>2</sup>・杉本 博子\*<sup>3</sup>・稲垣 美智子\*<sup>4</sup>

こまつ看護学校 \*<sup>1</sup>石川県立総合看護専門学校 \*<sup>2</sup>石川県厚生部

\*<sup>3</sup>石川県立高松病院 \*<sup>4</sup>金沢大学医学部保健学科

## How Teachers Can Learn New Methods of Educating Nursing-Patient Rapport

Mitsue Fujita, Keiko Sakai\*<sup>1</sup>, Noriko Kubo\*<sup>1</sup>,  
Shiho Kobo\*<sup>2</sup>, Hiroko Sugimoto\*<sup>3</sup> and Michiko Inagaki\*<sup>4</sup>

Komatsu Nursing School

\*<sup>1</sup>Ishikawa Prefectural School of Nursing and Public Health Nurses

\*<sup>2</sup>Ishikawa Prefectural welfare part

\*<sup>3</sup>Ishikawa Prefectural Takamatsu Hospital

\*<sup>4</sup>School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kanazawa University

### 要 旨

看護基礎教育において看護学生に対人関係能力としてのリレーションシップを育成することは重要な課題であると考えられる。対人関係能力を育成する側の看護教員の資質が学習者に与える影響は大きいと思われるが研究報告はほとんどない。そこで、県内の看護基礎教育機関の全教員134名を対象として、臨地実習において看護教員の属性と看護学生に求めるリレーションシップの関係及び、看護教員の属性と教育方法の関係を明らかにすることを目的に調査を行い以下の結論を得た。

1. 看護教員が学生に求めるリレーションシップは高い。
2. 看護教員の臨床経験年数が高くなると求めるリレーションシップは低くなる傾向にある。
3. 臨地実習における教育方法は教員の年齢・臨床経験年数による差異はみられない。
4. 上司からの指導、教員養成講習の受講は臨地実習での教育方法に違いをもたらす。

以上より、臨地実習において看護学生のリレーションシップを育成するための教育方法は教員としての専門的指導を受けることにより変化することが示唆された。

### キーワード

対人関係能力, リレーションシップ, 看護学生, 看護教員, 教育方法

## Abstract

During basic nursing education, it is very important for nursing students to learn how to build rapport with their patients. Whether they can learn it well or not seems to depend on personal qualities of their teachers. However, there has not been enough research on their effects of these qualities. Therefore, we researched by asking questions to all 134 teachers at the basic nursing schools in Ishikawa to see how the nursing teachers' personal qualities create their standards they require their students to meet, and their teaching methods. The findings are as follows.

1. The standard of the ability to build rapport they require their students to learn is very high.
2. The longer teachers' experience as a nurse becomes, the less they stress the importance of rapport to their students.
3. In instructing students at clinical practice, in spite of differences of their careers or ages, teachers often adopt similar ways of teaching.
4. Teachers who receive advice from their superiors and who attend teacher-training lectures have shown 'different' ways in teaching clinical practice.

In conclusion, teachers who receive advice from their superiors and attend teacher-training lectures bring 'different' approaches to teaching rapport in clinical practice.

## キーワード

ability of interpersonal relations, rapport, nursing student, nursing teacher, ways of educating

## はじめに

看護は人を対象にしており、相手との対人関係は避けて通ることはできない。自我の形成段階にある青年期の看護学生に、対人関係能力としてのリレーションシップを育成することは、看護教員として重要な課題と考えられる。一方、看護教員の看護観、教育観および教育方法が学習者に与える影響は大きく、対人関係能力としてのリレーションシップの育成においてはよりその傾向が強いと考えられるがそれについての研究報告はほとんどない。そこで、本研究では、看護教員が臨地実習において看護学生に求めるリレーションシップやそれを育成するための教育方法が看護教員の個人的属性によって影響するのか、それぞれの関係を明らかにし、看護学生の対人関係能力としてのリレーションシップを育成するための教員の課題を明確にすることを目的とした。

### 【用語の操作的定義】

本研究でのリレーションシップとは、学生と患者が人間対人間として、出会いから相互作用を重ねながら、その関係性を続け深めていくという一連のプロセス（深さ、質、段階などを含む）即ち、看護学生が患者家族と空間を共有し、個人的情報

や感情を相互に伝達しあい、ある一定期間続く関係性とした。

看護学の分野では的確な言葉が見つからず、社会心理学の用語（「親密な二人についての社会心理学」：ハロルド.H.ケリー<sup>1)</sup>）より引用した。

## 方 法

1. 調査対象：石川県内の看護基礎教育機関（3・2年課程）12校の全看護教員134名を対象とした。

2. 調査方法：自作の質問紙を使用し、研究の主旨に賛同が得られた看護教員に対し、各教育機関の看護の長あてに学校単位で一括郵送した。回答は無記名とし、各人から直接返送を依頼した。

3. 調査期間：平成11年3月23日～3月31日。

4. 調査内容：

1) 看護教員の属性－年齢・臨床経験年数・看護教員経験年数・学校勤務の動機・臨床経験と実習担当領域の一致・一週間の実習担当時間・教育指導者の存在・教員養成講習受講の8種類。

2) 学生に求めるリレーションシップ－用語の定義から、8つのカテゴリー（時間・空間・情報を分かち合う・感情を分かち合う・身体を通して

表1 質問紙「学生に求めるリレーションシップ」

項 目
1. 学生は、患者の態度・感情の裏にある心境をわかる
2. 学生は、患者には患者のベースがあることがわかる
3. 学生は、ありのままの自分を認め向上心を持っている
4. 学生は、自分の対人関係の傾向について気づきを得る
5. 患者には一人の人間としての考え・生き方があるとわかる
6. 学生は、患者の反応に基づいて意図的に働きかける
7. 学生は、患者の感情・思考を聞く
8. 学生は患者のありのままを受け入れる
9. 学生は、患者の悩み・苦痛を感じとる
10. 学生は、何を感じたかを内省する
11. 学生自身、患者－学生の間を客観視できる
12. 学生は、患者との心理的・物理的距離を配慮する
13. 学生と患者が、人間同士として信頼をよせている
14. 学生は、患者の表情・しぐさ・顔色等小さな変化も見逃さない
15. 学生は、家族の感情・思考を聞く
16. 学生は、自分の言動を振り返る
17. 学生は、看護における人間関係について学びを得る
18. 学生は、患者と会話をとるため話題提供する
19. 学生は、患者と病気についての話をする
20. 学生は、自分自身の個人的情報の内容・程度を識別し患者との会話に用いる
21. 学生は、患者・家族の個人的情報を聞く
22. 学生は、必要時患者のそばにいる
23. 学生は、自分自身の感情・思考を患者に話す
24. 学生は、意図的にタッチする援助を取り入れている
25. 患者－学生の間には、親密な会話・笑いがある
26. 学生は、患者と一緒に行動する
27. 学生が関わることで、患者の言動により変化がある
28. 学生は、患者のために何かしたいと感じる
29. 患者と接している学生の表情言動が生き生きしている
30. 学生は、患者を尊重した言葉づかいをする
31. 患者の前では、学生自身の個人的な喜怒哀楽の感情をコントロールする
32. 学生は、患者の私的な依頼に対しては理由を述べ断る
33. 学生は、患者に日常的な挨拶をする
34. 学生は、患者の感情が病気の種類・経過や援助で変化することがわかる
35. 学生は、患者のそばへ行く時間帯やいる時間を配慮する
36. 学生は、援助をとおして相手を理解しようとする
37. 学生が、患者の喜びを一緒になって喜ぶ
38. 患者－学生が、一緒になって課題に取り組んでいる

いつも求める・時々求める・どちらともいえない・あまり求めない・全く求めないの5段階尺度

分かち合う・配慮・深さ・学生の変化)を抽出し、独自に38項目の質問を作成した(表1)。尺度は、いつも求めるから全く求めないまでの5段階順序尺度とした。統計処理は、いつも求めるを5点、全く求めないを1点として点数化した。(190点から38点)

3) 教育方法－臨地実習で教員が意図的に行う一連の具体的な教授行動を、独自に25項目作成した(表2)。尺度はリレーションシップと同様5段階順序尺度とした。いつもそうしているを5点、

ほとんどそうしないを1点として点数化し処理した。(125点から25点)

5. 分析方法:統計パッケージHALBAU-4を使用。看護教員の属性8種類の内、年齢・臨床経験年数・看護教員経験年数の3種類とリレーションシップの関係は相関係数の検定を行い、学校勤務の動機・臨床経験と実習担当領域の一致・一週間の実習担当時間・教育指導者の存在・教員養成講習の受講とリレーションシップの関係は一元配置分散分析を用いた。

表2 質問紙「教育方法」

項目
1. 受け持ち患者に自己紹介する場面を学生に見せる
2. 患者へ思いやりのある態度を提示している
3. 患者のありのままを受容している
4. 自分の身だしなみを感じよく清潔にしている
5. 学生がのびのび実習できる雰囲気を提供する
6. 学生がのびのび実習を受け入れる
7. 学生の意見に耳を傾ける
8. 学生の行為や、学生自身について認めたり誉めたりしている
9. 学生に注意するときは、学生の立場に立って行う
10. 学生に患者理解の状況について質問する
11. 学生が行っているケアに参加する
12. 患者と学生の関係場面を観察する
13. 患者へのケアを実際にやってみせる
14. あなたは、ユーモアを發揮してる
15. 治療的コミュニケーション技法をやってみせる
16. 患者の言動を学生と共に考える
17. 学生が何を感じたかを内省する機会づくりを促す
18. 学生が自分自身や対人関係の傾向について気づくことができるよう関わる
19. 学生が患者との関係でつまづきを感じた場合は、学生自身を支援する
20. 対人関係の重要性や看護について話をする
21. 患者から学生の対人関係に関する声を聞く
22. 患者からの対人関係に関する声を学生にフィードバックする
23. 実習施設の職員から信頼を得るために関係づくりをする
24. 対人関係に関する文献を紹介する
25. 患者と学生の関係が、対人関係のどの段階にあるか説明する

いつもそうする・しばしばそうする・時々そうする・まれにそうする・ほとんどしないの5段階尺度

また、看護教員の属性8種類の内、年齢・臨床経験年数・看護教員経験年数と教育方法との関係は相関係数の検定を行った。それ以外の5種類の属性と教育方法の関係は1項目毎に  $\chi^2$  検定を行い分析した。

## 結 果

回答者78名中、有効回答75名（有効回答率56.0%）であった。

1. 看護教員の属性：平均年齢は40.4歳（SD=6.3）、平均臨床経験年数10.3年（SD=4.3）看護教員経験年数7.4年（SD=5.8）であった。

2. 看護教員の属性と看護学生に求めるリレーションシップの関係：看護教員が看護学生に求めるリレーションシップの平均は、160.9点（SD=17.8）。1項目の平均点は、4.2点であった。

看護教員の臨床経験年数と看護学生に求めるリレーションシップは負の低い相関（ $r = -0.268$ ）を示した。看護教員の経験年数と看護学生に求めるリレーションシップの間には、わずかではあるが正の相関（ $r = 0.189$ ）を認めた。看護教員の

年齢と看護学生に求めるリレーションシップの間には相関は認められなかった（ $r = -0.078$ ）（表3）。また、看護教員の他の属性（学校勤務の動機・臨床経験と実習担当領域の一致・一週間の実習担当時間・教育指導者の存在・教員養成講習の受講）と求めるリレーションシップには有意差は認められなかった。

### 3. 看護教員の属性と教育方法との関係：

臨地実習での教育方法の平均は91.0点（SD=14.7）であった。

教員の属性8種類中、年齢・臨床経験年数・教員経験年数と臨地実習における看護教員の教育方法との間に相関は認められなかった（表3）。それ以外の5種類の属性の内、学校勤務の動機（自ら希望・勧め・命令）と教育方法25項目では、「学生がのびのび実習できる雰囲気を提供する」という1項目において有意差が認められた（ $p < 0.01$ ）。

表3 看護教員の属性と求める  
リレーションシップ・教育方法

	求めるリレーションシップ	教育方法
年齢	r = -0.078	r = 0.051
臨床経験年数	* r = -0.268	r = -0.003
教員経験年数	r = -0.189	r = 0.099

\* p < 0.05 r = 0.20~0.40 低い相関

臨床経験と実習担当領域の一致（一致・不一致・どちらもある・していない）・一週間の実習担当時間（10時間以内・11~20時間・21~40時間・40時間以上）と教育方法25項目では有意差を認めた項目はなかった。

教育指導者の存在（同僚，先輩，上司，外部，不在）と教育方法25項目では、「患者のありのままを受容している」（p < 0.05）「患者へのケアを実際にやってみせる」（p < 0.05）の2項目に有意差が認められた。教育指導者の存在の中でも、特に上司より指導を受けている教員は、「患者のありのままを受容している」，「患者へのケアを実際にやってみせる」をいつもそうしていると答えた者が，他の教員より多かった（表4，5）。

教員養成講習受講（6ヶ月・8ヶ月・1年・未受講）と教育方法25項目との関係は「受け持ち患者に自己紹介する場面を見せる」（p < 0.01），

「学生の行為や学生自身について認めたり誉めたりしている」（p < 0.01），「患者へのケアを実際にやってみせる」（p < 0.05）の3項目において有意差が認められた（表6，7）。

## 考 察

看護教員は臨地実習で学生に，高いリレーションシップを求めているといえる。これは看護基礎教育において特に臨地実習での学生の対人関係能力を重要視していることを示している。しかし，看護教員の臨床経験年数が長くなると学生に求めるリレーションシップが低くなる傾向にあった。これは，看護教員が学生に高いリレーションシップを求めているという結果と一見矛盾しているように思われる。しかし，看護教員より臨床看護婦のほうが学生に求める看護技術の到達度が低くなる傾向にあるという報告<sup>2)</sup>にもあるように，リレーションシップを学生が到達すべき技術と考えるならば，臨床経験年数の長い教員は，臨地実習において学生に求めるリレーションシップが低くなるという結果は，納得することができる。臨床経験年数の長い教員は，臨地実習でのリレーションシップは，看護基礎教育で到達を求めるのではなく，卒業後に色々な看護を体験し培われていくものと捉えているのではないかと考えられる。

また，看護教員の属性8種類と臨地実習における教育方法との関係で，年齢・臨床経験年数・教員経験年数の3種類と教育方法に差は認められなかったが，看護教員としての経験年数が長くなると教育方法の点数がわずかではあるが高くなって

表4 教育指導者の存在と教育方法の項目  
「患者のありのままを受容している」

人数(%) n = 73 (n.a=2)						
	1. ほとんどしない	2. まれに	3. ときどき	4. しばしば	5. いつもしている	計
同僚	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (18.2)	15 (68.2)	3 (13.6)	22 (100.0)
先輩	1 (4.5)	2 (9.1)	5 (22.7)	8 (36.2)	6 (27.3)	22 (100.0)
上司	1 (5.9)	0 (0.0)	1 (5.9)	3 (17.6)	12 (70.6)	17 (100.0)
外部講師	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (75.0)	1 (25.0)	4 (100.0)
いない	1 (12.5)	0 (0.0)	1 (12.5)	4 (50.0)	2 (25.0)	8 (100.0)
計	3 (12.5)	2 (2.7)	11 (15.1)	33 (45.2)	24 (25.0)	73 (100.0)

$X^2 = 26.7$ ,  $df = 16$ ,  $p < 0.05$

表5 教育指導者の存在と教育方法の項目  
「患者へのケアを実際にやってみせる」

人数(%) n=72 (n.a=3)

	1. ほとんどしない	2. まれに	3. ときどき	4. しばしば	5. いつもしている	計
同僚	1 (4.5)	10 (45.5)	7 (31.8)	4 (18.2)	0 (0.0)	22 (100.0)
先輩	3 (13.6)	4 (18.2)	10 (45.5)	5 (22.7)	0 (0.0)	22 (100.0)
上司	1 (6.3)	1 (6.3)	6 (37.5)	3 (18.8)	5 (31.3)	16 (100.0)
外部講師	1 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (50.0)	1 (25.0)	4 (100.0)
いない	1 (12.5)	2 (25.0)	3 (37.5)	2 (25.0)	0 (0.0)	8 (100.0)
計	7 (9.7)	17 (23.6)	26 (36.1)	16 (22.2)	6 (8.3)	72 (100.0)

$X^2=29.4$ ,  $df=16$ ,  $p<0.05$

表6 教員養成講習の受講と教育方法の項目  
「自己紹介の場面を学生に見せる」

人数(%) n=75

	1. ほとんどしない	2. まれに	3. ときどき	4. しばしば	5. いつもしている	計
未受講	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (66.7)	3 (25.0)	1 (8.3)	12 (100.0)
6ヶ月	4 (9.8)	4 (9.8)	3 (7.3)	12 (29.3)	18 (43.9)	41 (100.0)
8ヶ月	0 (0.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	3 (60.0)	5 (100.0)
1年	1 (5.9)	0 (0.0)	5 (29.4)	6 (35.3)	5 (29.4)	17 (100.0)
計	5 (6.7)	5 (6.7)	16 (21.3)	22 (29.3)	27 (36.0)	75 (100.0)

$X^2=27.2$ ,  $df=12$ ,  $p<0.01$

表7 教員養成講習の受講と教育方法の項目  
「患者へのケアを実際にやってみせる」

人数(%) n=74 (n.a=1)

	1. ほとんどしない	2. まれに	3. ときどき	4. しばしば	5. いつもしている	計
未受講	0 (0.0)	2 (16.7)	9 (75.0)	1 (8.3)	0 (0.0)	12 (100.0)
6ヶ月	7 (17.5)	7 (17.5)	11 (27.5)	13 (32.5)	2 (5.0)	40 (100.0)
8ヶ月	1 (20.0)	2 (40.0)	2 (40.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
1年	0 (0.0)	6 (35.3)	5 (29.4)	2 (11.8)	4 (23.5)	17 (100.0)
計	8 (10.8)	17 (23.0)	27 (36.5)	16 (21.6)	6 (8.1)	74 (100.0)

$X^2=25.5$ ,  $df=12$ ,  $p<0.05$

いた。日々の教育実践が看護教員の能力・資質形成に影響する<sup>3)</sup>といわれているが、今回の研究では教員のどのような実践や経験が教育方法に影響を及ぼすのかは明確ではない。今後の課題と考えられる。

看護教員の上記以外の属性5種類の中で、教育方法25項目とに2項目以上の有意差を認めたのは、指導者の存在と教員養成講習受講であった。江崎は、「看護教員が能力・資質形成の契機として認識しているのは、学校外での研究活動、教育実践上の経験、学校内のすぐれた人物などが多い<sup>3)</sup>」といっている。学校外の研究活動には看護教員養成研修が含まれている。また、「看護教員は自己の行動や役割モデルを身近な学内の上司に求めている<sup>3)</sup>」ともいっていることから、看護教員としての専門的な指導を受けることと役割モデルの存在は、臨地実習での学生の教育方法に影響を与えらると思える。これらのことは、教員の研修の内容や方法を検討する資料としても重要であると考えられる。

尚、本研究の限界は対象が石川県内に限られていること、質問紙の信頼性と妥当性にあると思われる。

## まとめ

1. 看護教員が学生に求めているリレーションシップは高い。
2. 看護教員の臨床経験年数が高くなると求めるリレーションシップは低くなる傾向がある。
3. 臨地実習における教育方法は教員の年齢・臨床経験年数による差異はみられない。
4. 上司からの指導、教員養成講習の受講は臨地実習での教育方法に違いをもたらす。

以上より、リレーションシップの教育方法は教員が上司から受ける指導や教員としての専門的教育を受けることにより変化するものであることが示唆された。今後、教員となった以降の教員自身の自己研鑽や研修内容についてさらに研究する必要があるといえる。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました石川県内の看護専門学校教員の皆様方に深謝致します。

## 付記

本研究は、平成9～11年度石川看護研究会研究活動推進事業、看護教育部会において助成を受け

たものである。

## 文献

- 1) ハロルド.H.ケリー：親密な二人についての社会心理学～パーソナル・リレーションシップ～、黒川正流訳、ナカニシヤ出版、11、1989
- 2) 奥宮暁子、他：臨床看護婦が期待する看護基礎技術の到達度と実習体験の可能性（第1報）、第19回日本看護学会集録、看護教育、28-30、1988
- 3) 江崎フサ子：看護教員の能力・資質形成の契機、日本看護学教育学会誌、8(1)、29-37、1998